

十勝毎日新聞 十勝農業記事ハイライト

2018年 生産・取扱高

十勝JA取扱高 過去2番目の3320億円
畜産は初の2000億円台

2018年12月25日

十勝地区農協組合長会などは25日、2018年産農畜産物の管内JA取扱高（概算）を発表した。耕種（畑作）と畜産の合計額は3320億円となり、過去最高だった前年に次ぐ2番目の水準となった。心配された天候不順や胆振東部地震による大規模停電（ブラックアウト）の影響は想定より小さく、十勝農業の地力を示した。

3388億円を記録した前年からは2%の微減。組合長会の有塚利宜会長は「困難な一年だったが、大変な成果を収めた。十勝のプロ農家が人知の限りを尽くした成果だ」と評価した。

全体の6割を占める畜産部門は酪農、肉用牛が共に伸び、前年比3%増の2051億円。初めて2000億円台に到達した。生乳生産量は9月に大規模停電の影響で落ち込んだが、通年では前年を上回る見込み。乳価上昇や好調な子牛相場も寄与した。肉用牛では枝肉価格、素（もと）牛取引価格が堅調だった。

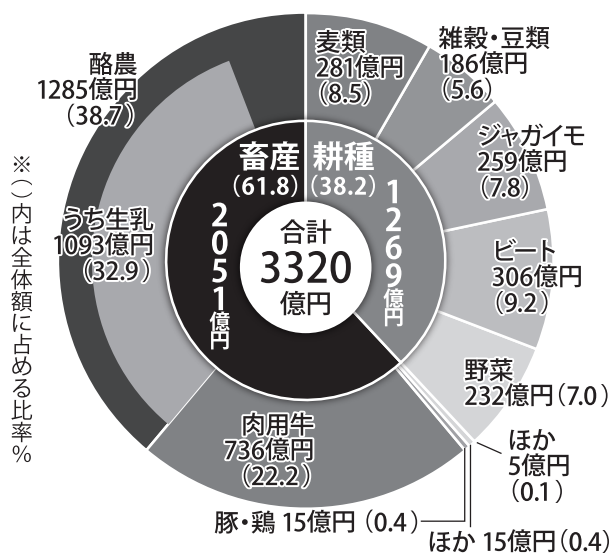
耕種部門は天候不順で収量や品質が低下し、9%減の1269億円。市況価格が堅調だった野菜（前年比19%増）を除いて全作物で前年を割った。

小麦は6月中旬以降の多雨、低温、日照不足により、26%減と減少割合が最も大きかった。豆類は小豆などで価格が上がったものの収量が伸びず7%減。小ぶりのものが多かったジャガイモは7%減となった。ビートは平年並みの反収（10アール当たりの収量）で糖度も高かったが、作付面積が前年を下回り8%減だった。

今後は環太平洋連携協定（TPP）11や欧州連合との経済連携協定（EPA）発効を控える。乳製品、牛肉、小麦などで影響が予想されるが、有塚会長は「グローバル農業時代に果敢に向かっていく」、十勝農協連の山本勝博会長は「国際競争に勝てるよう、収量増と品質向上に努力する」と述べた。

組合長会と十勝農協連、十勝総合振興局（三井真局長）が共同で発表、フードバレーとかち推進協議会の米沢則寿会長（帯広市長）も同席した。取扱高は管内24JAの見込額合計で、JA以外の商社が取り扱う金額は含んでいない。

◆2018年産 管内24JAの取扱高



◆JA取扱高の推移

